82　誌上発表

「諸気」について

渡部　栄輝
日本鍼灸研究会

病證用語は，時代や著者によって指し示す内容が異なるため，特定の医書を読むのに，後代に一元的にまとめられた病証概念を流用しても十分な理解は得られない．用語の意味内容の時間的変遷を勘案するとともに，その医書，もしくは著者の病證学史的な立ち位置を明らかにする必要がある．

たとえば江戸期に広く読まれた『南北経験医方大成論』（以下『大成論』）の病門「気（附諸疝膀胱小腸腎気）」では，始めに生理的な気の概論を述べた後，七情の乱れにより六蔵と胆に影響を及ぼして多證を生じる（「調摂非宜致生多證．故内因七情而得之．喜怒憂思悲恐驚者是也．喜傷於心者其気散．怒傷於肝者其気撃……」）として諸気の病證を論じ，附論としての諸疝，膀胱気，小腸気，腎気の解説がなされている．『大成論』は，明の熊宗立（1409～1482）編著『新編名方類證医書大全』（以下『医書大全』）の病論部分を再構成した医学書で，「気」についても，篇題から内容までそのまま『医書大全』が踏襲されている．

医書の病門立ては，各病證の内容を規定する枠組みであり，その医書の病態観の現れである．よって，諸書の同名あるいは近似した病門を総合的に考察することで，病證概念の時間的な変遷を辿ることが出来る．「気」もしくは「諸気」に関する病門の成立を『医書大全』より遡れば，『普済方』（1424）の諸気門，『玉機微義』（1396）の気證門，『仁斉直指方』（1260）の諸気附梅核気積聚癥瘕痞塊，『聖済総録』（1110年代）の諸気門，そして『諸病源候論』（610，以下『病源』）の気病諸候へと至る．

『医書大全』の諸気の病證部分は『普済方』から直接引用されたものであるが，その典拠は『三因極一病證方論』（1174，以下『三因方』）の「七気叙論」であり，そこでは喜怒憂思悲恐驚の七情から生じる病としての「七気」が定義されている．「七気」という語は，既に『小品方』（400年代半ば）で七気丸の主治症として初出し，『三因方』とは異なる分類の「寒気」「熱気」「怒気」「恚気」「憂気」「喜気」「愁気」が解説されており，それを受けた『病源』が気病諸候・七気候の病門を立て，『三因方』に先んじて七気を病證として確立させた．一方，「諸気」の初出は『素問』五蔵生成篇の「諸気者皆属於肺」であるが，病證用語として内容が規定されるのは『聖済総録』諸気門を嚆矢とする．但し，そこでは『病源』気病諸候・九気候で定義づけられた怒喜悲恐寒熱憂労思の「九気」が論じられる．『病源』の九気は，『素問』挙痛論を典拠とする．なお，『直指方』『普済方』は『病源』と『三因方』双方の七気論を並存させており，『聖済総録』『玉機微義』は九気を載録する．

『三因方』による七気の論説は，『素問』と『病源』の九気，並びに『小品方』と『病源』の七気についての条文を，多少の改変を加えて組み替えることで構成されている．喜・怒は『小品方』・『病源』七気候の条文を，恐は『素問』・『病源』九気候の条文を継承し，思・悲の条文は『小品方』・『病源』七気候の恚気・愁気から移行され，憂は『素問』・『病源』九気候の悲と『小品方』・『病源』七気候の憂気の条文が組み合わされ，驚は『素問』の驚（『太素』は憂に作る）と『病源』九気候の憂の条文が組み合わされている．三因論を発明した陳無択が，内因と設定した喜怒憂思悲恐驚の七情を，病因として明確に位置づけるために，それと符合するように旧来の七気と九気を再編して新たに病證を創出したと推察される．『医書大全』『大成論』が，『素問』系の九気でも『小品方』系の七気でもなく，『三因方』の七気のみを選別して諸気門を立てたことは，その医学史的な位置づけを把握する上で示唆的である．